

II Samuel 16:23, 17:1-29, 18:1-22

(II サムエル記16:23)「当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。」

アヒトフェルのことばには、まるでそれが神さまからの命令であるかのように、人々は疑問なしに従いました。主がダビデに語られたことばが、アブシャロムの行動によって成就しました。

(II サムエル記12:11-12)「『【主】はこう仰せられる。「聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行おう。』」

いままた、ダビデは前のようにほら穴や地の穴に隠れます。彼はどうするのでしょうか？アブシャロムは、ダビデの軍隊に対して勝利を得ようとしています。でも、ダビデは老練なベテランであり、どのように戦うかをよく知っています。アブシャロムは、自分の父親に逆らって、大きな危険を冒しています。悲劇的なのは、ダビデがアブシャロムを愛しており、彼を助けたいと思っていることです。

ダビデにとって、困難な日々でした。今に至っては、あなたの心はダビデに対する同情で満ちていると確信します。でも、ダビデは泣き言を言ったり、声を出して泣いたりしません。彼は、実質的に次のように言っているのです。

「神さまとの関係が正しく保たれていると分かっている限り、私は私に降りかかるこのような重荷を耐えよう。」

ダビデは偉大な人物でした。彼はとんでもない罪を犯しましたが、それは、すばらしい彫像にひとつの傷がついているようなものです。今日、多くのクリスチャンも同じです。傷がひとつもない人に、会ったことがありますか？私たちはみんな、自分の人生に傷があります。その傷があっても、私たちを放り出されることのない、神さまに感謝しましょう。

17章、18章

テーマ：アブシャロムとダビデの間の内戦。

17章で、アブシャロムはアヒトフェルと、ダビデの友フシャイの助言を聞きます。アブシャロムが、ダビデと彼の家来たちが戦場でベテランであり、アブシャロムには援軍が必要だというフシャイの助言を受け入れたとき、ダビデは逃げて戦いに備えることができました。18章では、双方が内戦に参加します。戦いはアブシャロムの死で終わります。18章は、殺された息子に対する感動的なダビデの悲しみで終わります。

アヒトフェルとフシャイの相対する進言

ダビデのいろいろな経験を追って来ましたが、最初にはダビデの勝利を見ました。今、彼のトラブルを見ています。事実、ダビデは今、本当にトラブルにあっています。ダビデ自身の息子であるアブシャロムが、ダビデに対して謀反を起こしているのです。私はダビデがこの地上の誰よりもアブシャロムを愛していたと信じています。これは王にとって、心痛でした。ダビデは、エルサレムから退きます、なぜなら、エルサレムが戦場になったり、破壊されたりするのをダビデが望まなかったからです。そうならないようにダビデは、愛する町を去りました。彼は、フシャイがダビデに有利になるような助言をすることができるように、彼をアブシャロムのところに送り返します。ダビデの議官だったアヒトフェルは、アブシャロムに寝返りました。17章では、このふたりの相談役がアブシャロムに、彼の父を今このときに攻撃すべきか否かで正反対の助言をします。

(II サムエル記17:1-2)「アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。『私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、彼を襲います。ダビデは疲れて氣力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。』」

言い換えれば、もしダビデひとりを滅ぼすことができれば、謀反は中断しアブシャロムが王になることができるのです。もちろんアヒトフェルの助言は、もし遂行されればダビデにとって命取りになります。アヒトフェルは自分の計画を語ります。

(II サムエル記17:3-4)『私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。』このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。」
アブシャロムさえも、この冷酷な計画に同意しました。

(II サムエル記17:5-6)『しかしアブシャロムは言った。『アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。』フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。『アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。』
フシャイがそこにいたのは良いことでした。なぜなら、彼は全く違う作戦を提供したからです。彼はアブシャロムにとっても良いアドバイスを与えました。でもそれは、ダビデに有利なアドバイスです。ダビデはとても弱い立場にあって、どうしても時間が必要でした。

(II サムエル記17:7-10)『するとフシャイはアブシャロムに言った。『このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。』フシャイはさらに言った。『あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒くなっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、「アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た」と言うでしょう。そうすると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。』
これは、ダビデに益となるものではありませんでしたが、フシャイはアブシャロムにとってもよいアドバイスをしています。彼のアドバイスは、簡単に言えばこういうことです。
「アブシャロムよ。あなたは、自分が戦士ではないことを認めなければなりません。あなたの父上は戦士です。父上は野を良くご存知です。父上はベテランで、頑健です。自分の勇士とともに連れておられます。ダビデと部下たちはこのできごとでいらだっています。彼らはまさに今、自分たちの傷をなめ、子を奪われた母熊のようです。この母熊は、本当に戦いますし、普通のときに比べて、倍も危険です。今ダビデを攻撃するのは愚かです。でも、とにかく攻撃したとしましょう。ダビデは、前にも追いかけられたことがあるのです。彼は追っ手から逃れることの専門家です。サウルは何年も彼を追いかけてきました。ダビデは人々の間にはいないことでしょう。どこに隠れたらよいか、よく知っています。どのようにのがれるかも知っているでしょう。彼の軍の中へ入って行って、ダビデを見つけなかったとしましょうか。あなたが戦いに負けているという、その知らせはすぐに伝わります。そして一時的にあなたについていた人々は、あなたを離れていくでしょう。」
今、フシャイはアヒトフェルの助言の判断の間違いを指摘し、もうひとつの作戦を語ります。

(II サムエル記17:11-12)『私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。われわれは、彼を見つけしだい、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士たちを、ひとりも生かしておかないのです。』
彼はアブシャロムに次のように言っています。
「大事なことは、あなたが戦いに行く準備ができていないということです。アヒトフェルも戦いの準備ができていません。ただ数千人の人々を連れて行くだけでは、ダビデを打ち負かすことはできません。あなたがしなければならないことは、全イスラエルを一箇所に集め、あなた自身が軍隊を率いて戦いに臨むことです。これこそ、王に求められていることです。父上はそうにして王座につかれたのです。父上はまず、偉大な将軍です。私たちは彼と彼の部下たちを数で圧倒しなければなりません。」フ

シャイのアドバイスは良いアドバイスでしたが、それはアブシャロムのための益にはなりませんでした。ダビデに益になるように与えられたのです。ダビデに偵察する時間を与えるのです。

さて、アブシャロムとイスラエルの人々は、フシャイの助言を何と思ったでしょう？

(II サムエル記17:14)「アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。『アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。』これは【主】がアブシャロムにわざわざいをもたらそうとして、【主】がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。」

アブシャロムと彼のアドバイザーたちは、フシャイのアドバイスのほうが優れていると感じました。とても率直に言って、フシャイの助言は確かにアヒトフェルの助言よりも優れていました。でもそれはダビデの立場から言っていることでした。神さまはダビデのために働いておられました。

ダビデに送られた警告

彼らがすべての民を集めてアブシャロムのもとにひとつにしようとしていたとき、フシャイはダビデに警告を送りました。彼はすばやくヨルダンを超えて向こうへ逃げなければなりません。このあとの数節で、スパイがどのように動いたかが分かります。メッセージがダビデに届いたとき、彼は素早く反応しました。

(II サムエル記17:22)「そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。」

アヒトフェルの自殺

アヒトフェルは誇り高く、とても尊敬されていたアドバイザーだったので、自分の助言が入れられなかったのを見たとき、彼は自分のキャリアは終わったと考えました。記録には、彼は家を片付けて、首を吊ったと書かれています。

アブシャロム、ダビデを追う

今アブシャロムはイスラエルのすべての部族からの大きな軍隊を得、彼らはダビデを追いかけます。

(II サムエル記17:24-26)「ダビデがマハナインに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。」

ダビデは自分の人生の多くの部分を、誰かからのがれることで過ごしました。もちろんこの場合は、間接的には自分の罪のせいです。

ダビデは実際に、とても難しい立場にいます。彼はこれと言う準備もなしに、エルサレムから逃れました。彼に忠実な人々は彼と一緒に逃げました。

(II サムエル記17:27-29)「ダビデがマハナインに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。」

ダビデは、まわりに多くの味方がいることに気づきます。彼らはダビデを知っており、彼が戦士だということも知っていました。これらの国々の支配者たちは、おそらくアブシャロムにはほとんど信頼を置いていなかったことでしょう。彼はずるく、油断がならないことを知っていましたから。でも、彼らはダビデを信頼しています。そこで彼らは、ダビデと彼の部下たちの困難を和らげるために、物資を持って来ます。

アブシャロムの遅れがダビデに、味方から物資を受け、戦いのために軍隊を準備するチャンスを与えました。

内戦

(II サムエル記18:1-2)「ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊の長、百人隊の長を任命した。ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツェルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。王は民に言った。『私自身もあなたがたといっしょに出たい。』」

ダビデは部下たちと一緒に戦いに出たいと思いました。

(II サムエル記18:3)「すると民は言った。『あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとい私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。』」

軍隊は、ダビデが戦いに出ることを拒否しました。

(II サムエル記18:4-5)「王は彼らに言った。『あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。』王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。『私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。』民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。」

この章は、ダビデの生涯で、もっとも悲しい章のひとつです。ダビデの罪の章はもっとも汚らわしい章ですが、この章は、一番悲しい章です。なぜなら、ダビデの息子アブシャロムの死が記録されているからです。彼らがダビデに戦いに出ないようにと願ったので、軍隊が行進して行く間、ダビデは門のそばに立っていました。軍隊は3人のリーダーのもとに出て行きます。ヨアブ、アビシャイとイタイです。この3人の隊長たちが通るとき、ダビデは彼らに自分の息子をゆるやかに扱ってくれるようにと頼みます。軍隊のすべての人々が、王がこのように命令しているのを聞きました。幾人かは微笑んだでしょうが、他の者たちは憤慨したのではないかと私は思います。アブシャロムはいつでもトラブル・メーカーでしたから、彼らはアブシャロムを取り除いてしまいたかったことでしょう。ところが、ダビデは自分の息子を愛していて、彼に死んで欲しくなかったのです。ダビデは隊長たちに言いました。

「私の子、アブシャロムをゆるやかに扱ってもらいたい。」

ダビデの部下たちは、ダビデが言ったことを聞きました。

(II サムエル記18:6-7)「こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行われた。イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。」

これは内戦です。とんでもないことでした。アメリカでも内戦がありました。私たちは兄弟同士が戦う悲しさを知っています。ダビデは戦略家で将軍でした。アブシャロムの仲間には、誰ひとりとしてダビデの能力や、ダビデの3人の隊長たちの能力に対抗できる人物はいませんでした。ですから、イスラエルの子らは戦いに負けたのです。

(II サムエル記18:8)「戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。」

アブシャロムの兵士たちは、ダビデの軍隊から逃げようとするとき、エフライムの森で迷ってしまいました。彼らは閉じ込められてしまったのです。剣に倒れたよりも、密林のせいで彼らの多くが死にました。彼らはダビデと戦うのに、間違った場所を選んだのです。

アブシャロム、ヨアブに殺される

(II サムエル記18:9-10)「アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは驃馬に乗っていたが、驃馬が大きな榎の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が榎の木に引っ掛かり、彼は

宙づりになった。彼が乗っていた騾馬はそのまま行っただけ。ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。『今、アブシャロムが榎の木に引っ掛かっているのを見て来ました。』

見たところ、アブシャロムが騾馬に乗って林を抜けようとしたときに、アブシャロムの頭が榎の木のまたに引っかかってしまったようです。ついにながら、彼は逃げていました。そして彼が木に引っかかったとき、騾馬はそのまま行ってしまい、アブシャロムはかなりの苦境に立たされました。他の状況下であったのなら、このできごととはユーモラスでさえあります。この場合はそうではありませんでした。

(II サムエル記18:11)「ヨアブはこれを告げた者に言った。『いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。』」

この人は、ヨアブが、ダビデの息子である王子を殺したいと思っていることにショックを受けます。

(II サムエル記18:12-13)「その男はヨアブに言った。『たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、「若者アブシャロムに手を出すな」と言って、お命じになっているからです。もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。』」

この兵士は言いました。

「王は私たちにご自分のご子息に手を出すなと言われました。そしてもし私がご子息に何かしたなら、あなたが私を罰せられることでしょう。」

でも、ヨアブにはこの人と議論している暇はありませんでした。彼には、すぐに片付けてしまわなければならない仕事があったのです。

(II サムエル記18:14-17)「ヨアブは、『こうしておまえとぐずぐずしてはおられない』と言って、手に三本の槍を取り、まだ榎の木の真ん中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのこの自分の天幕に逃げ帰っていた。」

アブシャロムが死んだとき、謀反は終わりました。ヨアブには、アブシャロムを殺す権利はありませんでした。特にダビデがアブシャロムに触れてはならないと命令をした後はなおさらです。ところが、ヨアブはアブシャロムが起こしたすべてのトラブルに嫌気がさしており、この若者が死ねば謀反は終わるということを知っていました。

(II サムエル記18:19-22)「ツアドクの子アヒマアツは言った。『私は王のところへ走って行って、【主】が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。』ヨアブは彼に言った。『きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。』ヨアブはクシュ人に言った。『行って、あなたの見たことを王に告げなさい。』クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。『どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。』ヨアブは言った。『わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。』」

ヨアブはアヒマアツにアブシャロムの死の知らせを持ってダビデのところに行かせるのは気が進みませんでした。なぜなら、ヨアブは王に知らせるべき必要な情報がすべてそろってはいなかったからです。